

構成物との関係によって伺える意図を考察するためである。

『ブリハット・サンヒター』では、寺院の立地として、豊富な水を得られるところ、遊園林のあるところ、静水面の近辺でさまざまな水鳥たちが集まっているところ、川の合流点や中州など川の流れに面するようなどころ、森や川や山や滝の近辺、遊園林をもつ町の中、バラモンなどの敷地として適当なところがあがっている。ガルバ・グリハの大きさは、祠堂の横幅の半分となっている。

『サマラーンガナストラダラ』では、森の中、吉祥なところ、南北方向の街路に沿って、都市の中央、都市の内外と規定している。しかし、ガルバ・グリハについての確実な記述はない。

『マヤマタ』では、特定のヴァーストゥ・デーヴァターの場所、都市の中央、都市の周囲と規定している。ガルバ・グリハは、祠堂の大きさの三分の一、五分の三、七分の四、九分の五、十一分の六、十三分の七、十五分の八、十七分の九、または、半が横幅と記している。

寺院の立地は、地上にあるが天界に近いということで聖性が高く感じさせたり、流れる水によって浄性が高く感じさせたりという特性を持っている。そして、周囲に小祠堂が併設され、中央部の持つヒエラルキーや聖性の高さを示している。都市などでは、中央という他よりも尊いとする場所に寺院を設定している。また、周囲に建てるものは、周囲と隔絶を計り内部の浄性を保つ守護神としての役割が期待されていると思われる。

プーリャーによって、浄めが行われるので、浄性を高める働

きをする。ヴァーストゥ・プーリャーは、土地選定のたびに繰り返行われるので、次第に土地の浄性が高まる。

ガルバ・グリハの広さについては、祠堂の大きさとの比例関係で表される。この割合は、敷地を三分割したときのダイヴァの部分にあたる。そして、祠堂の位置も、寺院の中でも浄性の高い位置であり、周囲の小祠堂によって祠堂の聖性が高められている。このように、ガルバ・グリハは周囲よりもプーリャーの繰り返して浄められた聖性が高い場所である。

そして、三文献の内容比較から、古代には北インドでもガルバ・グリハが存在したが、十一世紀までに設定されなくなり、南インド系の文献に残っているもので、建築形体の分化が見られる。南インド系では塔状につくる祠堂基部に壁に囲まれたガルバ・グリハが存在するが、北インド系ではガルバ・グリハという場所がなくなっていることがわかった。

#### インドの歴史教科書における

##### ヒンドゥー・ナシヨナリズムの叙述

澤田 彰宏

本発表は、インドの国立教育機関(NCERT)作成の中等教育用歴史教科書において、ヒンドゥー・ナシヨナリズムがいかに記述されているかを検討するものである。

インド近現代史の大きな問題の一つは宗教対立(南アジアではコミュニズムと呼ぶ)であり、その帰結は印パ分離独立である。そして現代のコミュニズムの最大の問題はヒンドゥー・ナシヨナリズム(HN)である。これは究極的にはヒンド

ウー教をインドの国家原理としようとする運動であり、インド人民党(BJP)はその政治ウイングである。

このBJPが今世紀初頭に政権の座にあったとき、歴史研究や教育への介入を起こした。同時に歴史教科書が新しく作成されたが、この教科書は教育のヒンドゥー化として、大きな批判の対象となった。その後、政権が国民会議派に移ったことでこの問題は一応終結した。本発表では、この歴史教科書問題の理解のために、介入時とその前後の時期という三つの時期(出版順にA、B、C期と表記)の教科書を比較検討することを目的とする。

教科書分析のためにヒンドゥー・ナショナリズム運動の思想的基盤ともいえるV・D・サーヴァルカル著『ヒンドゥトゥヴァ』を参照した。そこに描かれる「ヒンドゥー・ネーション」の特徴、すなわちヒンドゥーは古代からのインドの住民であり、ひとつの種族である。ムスリムは侵入者であり、非暴力主義はインドの防衛のためには必ずしも善ではない、などの視点を援用し、①サーヴァルカルと関連団体、②武力を用いた革命家の運動、③印パ分離独立、④ガンディーの暗殺の四点について教科書の検討を行った。

内容を見ると、A期が最も Kommunismus を強く批判している、公的領域で宗教が政治力をもつことへの批判、宗教が私事であることも明確に記している。また、ムスリム(連盟)に分離独立や暴動の責任を押し付けないように配慮しているように見える。B期は革命家の英雄視や、ムスリム連盟が分離独立主義者であったとの主張が明らかである。C期はテーマ別に章立

するという記述のため、民族独立運動や分離独立が近現代史すべての出来事・重要事ではないという内容となり、その点では Kommunismus 批判が見えにくくなっている。

三期を通して検討すると、たとえB期であっても、どれもHNについての具体的な記述がないことがわかった。少なくともこの点に関してはB期においても「新しい歴史」を描くことはしなかったようだ。ガンディーについても単に「独立の父」としてだけではなく、Kommunismus を除去しようとしていた記述がどの教科書にも見られた。

だが、内容は、「Kommunal化」以後作成の新しい教科書(C期)よりも、それ以前(A期)の方が Kommunismus に対して(および宗教の政治化批判の記述から)HN批判が明らかであり、またムスリムへの配慮も見られた。ここには積極的な(それゆえ素朴な)インド的セキュラー志向が読める。一方、C期は、そういった姿勢は打ち出しつつも、歴史叙述方法の変化もあり、この点に関しては以前よりわかりにくく(弱く)なっている。時期を考えれば、A期よりも強いHN批判が見られてもおかしくないのだが、あえてそうはしなかったところに、HNはまだ現在形であって歴史上の事象ではないという姿勢が伺われ、扱いが難しいゆえに中立性を保とうとした叙述になったといえるだろう。